鶴光路練引遺跡

1997

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序　　文

前橋市は、群馬県の中央部に位置し、北に赤城山や榛名山を望み、市内を大河利根川が流れる、自然にあふれた「水と緑と詩のまち」として発展してきた町です。

また、前橋市は歴史豊かな町でもあります。市内からは、数万年の歴史を示す石器が発見されており、現代にいたるまでの数々の遺跡や史跡が残されています。

鶴光路練引遺跡は、前橋市南部の古代条里水田の想定域に位置しています。この地域は現在も広く水田が広がり、市内の農業生産でも主要な位置を占めています。

近年の各種開発により、古代の様子が明らかになってきていますが、古墳時代から中世にいたる水田が何層にも見つかっており、古代から農業生産の中心地であったことが明らかになってきています。

近くにある「公田」の地名は古代の土地制度のなごりともいわれており、古い歴史がこの地域には残されています。

今回の発掘調査によって、平安時代末期に降下した火山の砂でおおわれた水田が見つかりました。調査範囲が限られており、水田の区画の完全な検出には至りませんでしたが、本地域の歴史解明に貴重な資料を加えることができました。

本調査実施にあたりましては、事業課の生涯学習課の方々や発掘調査を担当いたしました山武考古学研究所、発掘調査に従事していただいた作業員の方々には、厳しい北風の吹く中の作業で大変であったと思いますが、ご理解ご協力をいただきありがとうございました。

本報告書が本市の歴史解明の参考になれば幸いに存じます。

平成９年３月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団長　中　西　誠　一

例　　言

1．本書は、下川淵公民館建設事業に伴う鶴光路練引遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．本遺跡の略称は８Ｇ16とする。
3．調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団から委託を受けた山武考古学研究所が主体となって行った。
4．調査の要項は下記の通りである。
　調査住所　群馬県前橋市鶴光路町59－３他
　調査期間　平成９年３月４日～同年３月28日
　調査面積　1780㎡
　調査担当　井野誠一・野平仲一
5．本書の執筆はⅠを井野、その他を野平が担当した。
6．現地での座標・水準点の設置、遺跡の平面測量は、丹生サーヴェイへ委託して行った。
7．発掘調査で得られた資料は、前橋市教育委員会が保管する。
8．発掘調査期間中、下記の諸機関に御指導・御協力を賜った。記して感謝の意を表するものである。
（順不同　敬称略）
群馬県埋蔵文化財調査事業団　東日本重機　新成田総合社　丹生サーヴェイ　宮下工業
9．発掘調査参加者は下記の通りである。（敬称略）
新井正枝　石川弘　岡田頼伏　小野里岩男　小野里ミト　神山祐吉　桜井弘　佐野勝次郎　品川成夫
高橋孜　中村新太郎　奈良岩雄　丸山民江　宮前実　矢島アイ子

目　　次

本文

序文
例言・目次
Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　遺跡の位置と環境……1
Ⅲ　調査の方法……1
Ⅳ　調査の経過（調査日誌抄）……2
Ⅴ　基本堆積土層……2
Ⅵ　検出された遺構……2
Ⅶ　まとめ……6
写真図版
抄録

挿図目次

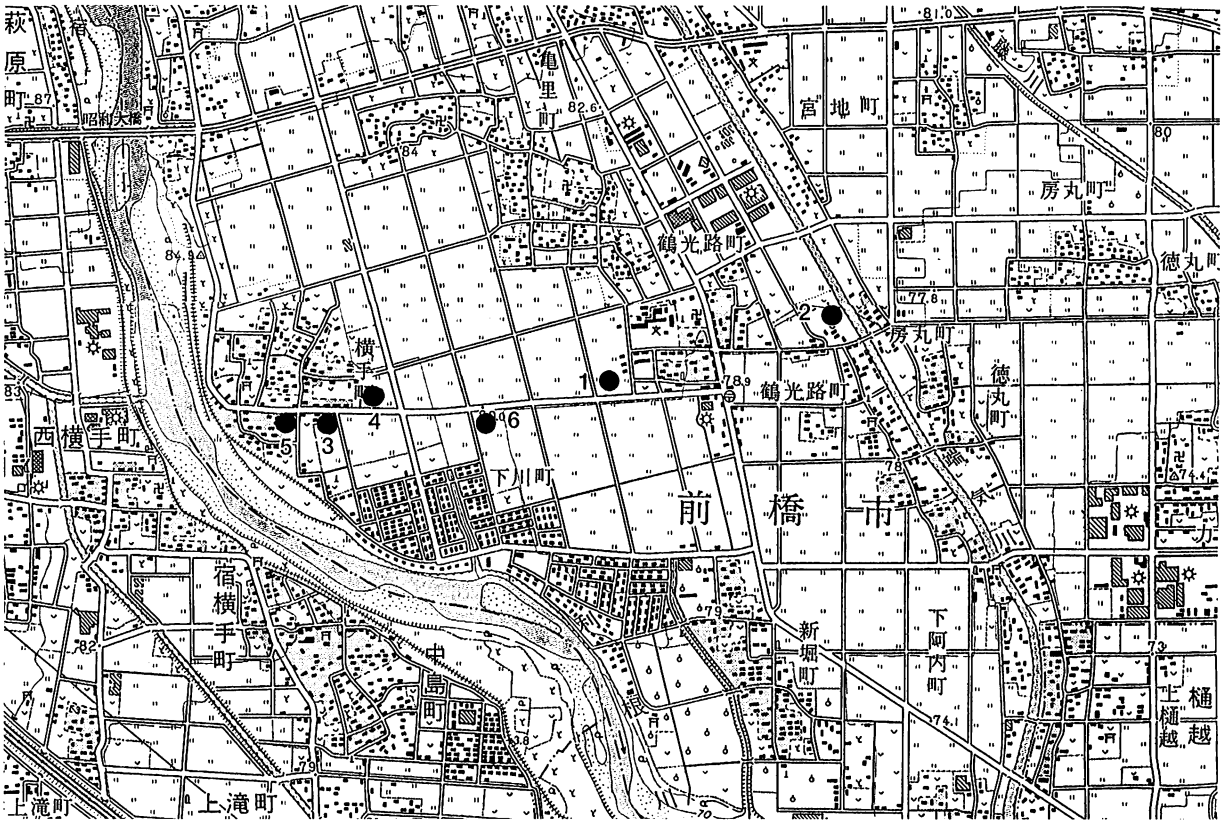
第１図　遺跡の位置と周辺遺跡
第２図　遺跡の位置（明治時代の地図）
第３図　基本堆積土層図……2
第４図　全体図・畦畔……3
第５図　溝・土坑……5

表目次

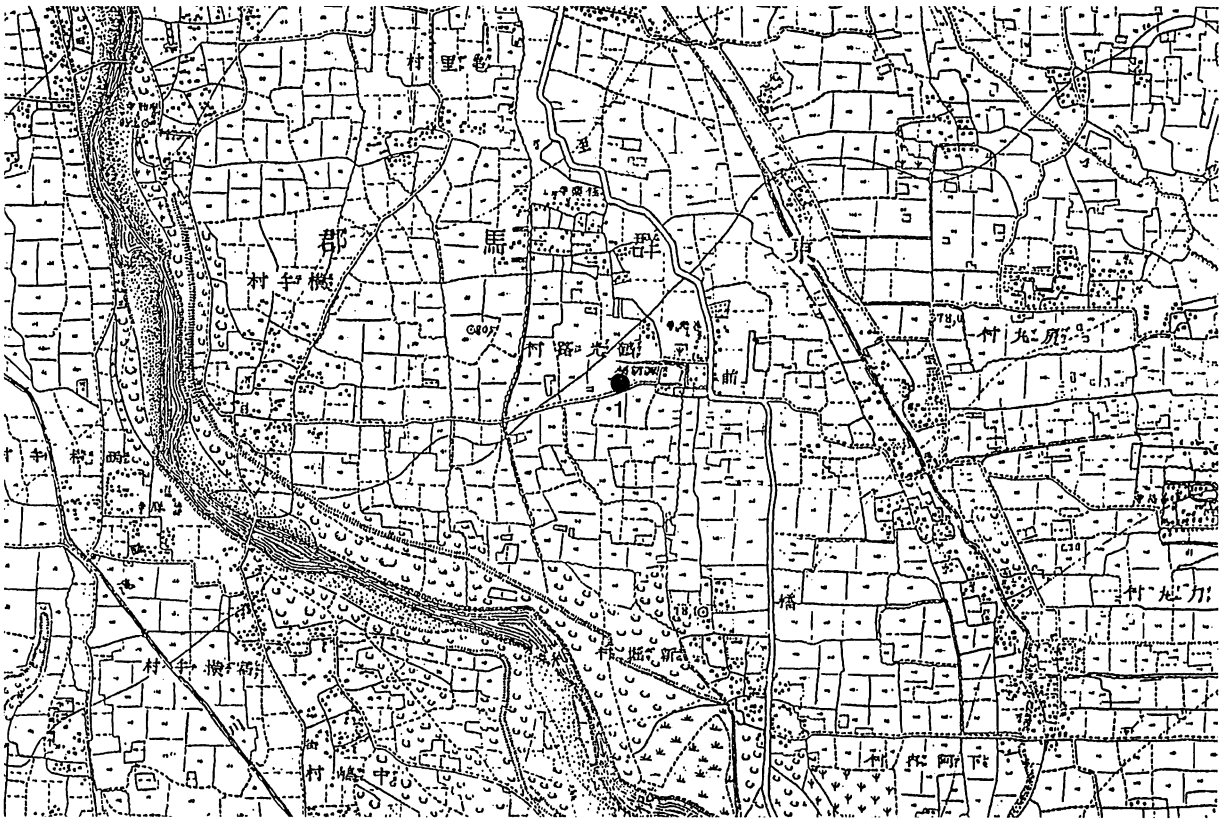
第１表　水田畦畔計測表……6
第２表　土坑規模計測表……6
第３表　溝規模計測表……6

写真図版目次

ＰＬ１－１．調査区全景（西→）
　　２．調査区南東側全景（南→）
ＰＬ２－１．基本堆積土層（南→）
　　２．畦畔Ａ－Ａ’（南→）
　　３．畦畔Ｂ－Ｂ’（南→）
　　４．調査区北側　足跡等全景（東→）
　　５．１号土坑全景（北→）
　　６．２～７号土坑全景（東→）



第１図　遺跡の位置と周辺遺跡（国土地理院２万５千分の１「高崎」・「前橋」）



第２図　遺跡の位置（明治21年陸地測量部発行、地方迅速測図「倉賀野」２万分の１を80％縮小）

Ⅰ　調査に至る経緯

鶴光路練引遺跡は前橋市南部の条里水田想定域に位置している。

平成８年10月25日に、事業課の生涯学習課より本遺跡内での下川淵公民館建設工事実施の連絡があり、協議が行われた。

協議の結果、遺跡の状況について確認調査を実施することとなり平成８年12月26日に行った。調査の結果、平安時代の水田面が確認された。

平成９年１月９日に保存協議を行なったが、現状保存は困難であるとのことで、発掘調査を行い記録保存することとなった。

その後、平成９年１月30日付けで前橋市長萩原弥惣治より埋蔵文化財発掘調査の依頼が提出され、民間調査機関への調査委託の方向で協議を実施した。

協議後の平成９年３月４日付けで発掘調査委託契約が締結され、３月28日までの調査期間で発掘調査が実施された。発掘調査は三者契約の形で前橋市と山武考古学研究所および前橋市埋蔵文化財発掘調査団の間で締結された。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

本遺跡は、前橋市の南部、高崎インターチェンジから東南東へ約３㎞、前橋台地上の後背湿地に位置する。周辺では南流する利根川が、西方約1.5㎞のところで南東へカーブし、東方約１㎞を南流する端気川と、南東約2.5㎞地点で合流する。本遺跡からは西方約50㎞先の浅間山を遠望することができる。

本遺跡の周辺には、Ａｓ－Ｂ（浅間Ｂ軽石）下水田跡が検出された西田遺跡（２）や井戸南遺跡（３）、横手宮田遺跡（４）があり、他には浅間神社古墳（５）などがある。また、本遺跡南側の道路を挟んで、横手湯田遺跡（６）が近接し、北関東自動車道建設に伴う発掘調査が行われている。同遺跡でも本遺跡と同様Ａｓ－Ｂ下水田跡などの遺構が調査されており、本来的に両遺跡は同一の遺跡と考えられる。

Ⅲ　調査の方法

発掘調査は試掘調査の結果をもとに、遺構確認面（Ａｓ－Ｂ上面）までは重機を用いて表土を除去し、その後は人力でＡｓ－Ｂを掘り下げ、水田面・畦畔・水口等の検出に努めた。調査区西側（約15ｍ四方範囲）はＡｓ－Ｂの残りが悪かったので、調査区に沿ってトレンチを設定し、Ａｓ－Ｂの堆積状況を観察した。その結果Ａｓ－Ｂの堆積は確認されず、この地区の表土除去は行わなかった。

調査区内の基準杭は、公共座標（第Ⅸ系）を基に10ｍ四方のグリッドを設定した。基準を北西角（Ｘ＝37,000、Ｙ＝－66,230）にし、南北軸にアルファベット、東西軸に算用数字をあてて、Ａ１・Ａ２・Ａ３…と表記した。

土坑・溝は堆積状況を観察しながら掘り下げ、随時必要に応じて写真・実測の記録を行った。

実測図は平面図を1/40、断面図を1/10の縮尺で作成した。

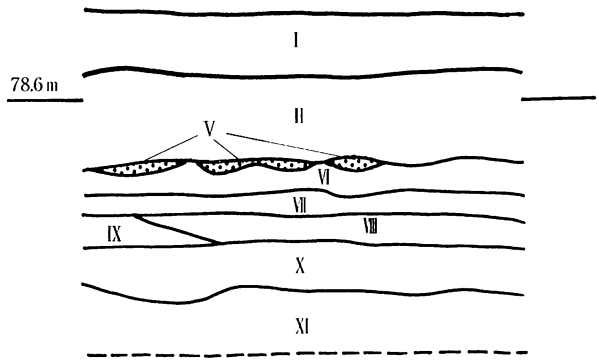
写真撮影は随時行い、白黒35㎜・カラースライド35㎜の２種類を用いた。調査区の全景写真はハイライダーで行った。

Ⅳ　調査の経過（調査日誌抄）

3月4日　発掘調査の準備を開始する。
10日　重機による表土除去を開始する。
12日　Ａｓ－Ｂの掘り下げを開始する。
14日　重機による表土除去を終了する。
24日　基準点・水準点測量を行う。
25日　ハイライダーで調査区の全景写真を撮る。
26日　遺構の平面測量を開始する。
28日　遺構の平面測量を終了し、発掘調査を終了する。

Ⅴ　基本堆積土層

本遺跡の基本堆積土層は調査区北東角で観察し、下図の通りである。観察地点ではⅢ・Ⅳ層は削平されたためか、見られなかった。Ⅳ層は中世の水田構築層と思われるが、今回中世の水田跡は検出されなかった。Ⅴ層がＡｓ－Ｂ堆積層であり、現地表面下約20～40㎝で検出される。Ⅴ層以下の層序の中に榛名－伊香保テフラ（ＦＰ）、榛名－渋川テフラ（ＦＡ）、Ａｓ－Ｃ（浅間Ｃ軽石）及びそれに伴う水田跡は検出されなかった。



Ⅰ層　暗灰褐色土　現耕作土。
Ⅱ層　褐灰色土　白色粒を多量に含む。
Ⅲ層　褐灰色砂質土　鉄分によって黄褐色味を帯びる。
Ⅳ層　暗褐灰色砂質土　鉄分によって赤褐色味を帯びる。
Ⅴ層　Ａｓ－Ｂ（浅間Ｂ軽石）
Ⅵ層　黒色粘質土
Ⅶ層　灰色粘質土
Ⅷ層　暗灰色粘質土
Ⅸ層　灰色粘質土　Ⅶ層より明るい。
Ⅹ層　黒色粘質土　鉄分が浸透している。
Ⅺ層　暗灰色粘質土　灰白色粘質土を大量に含む。

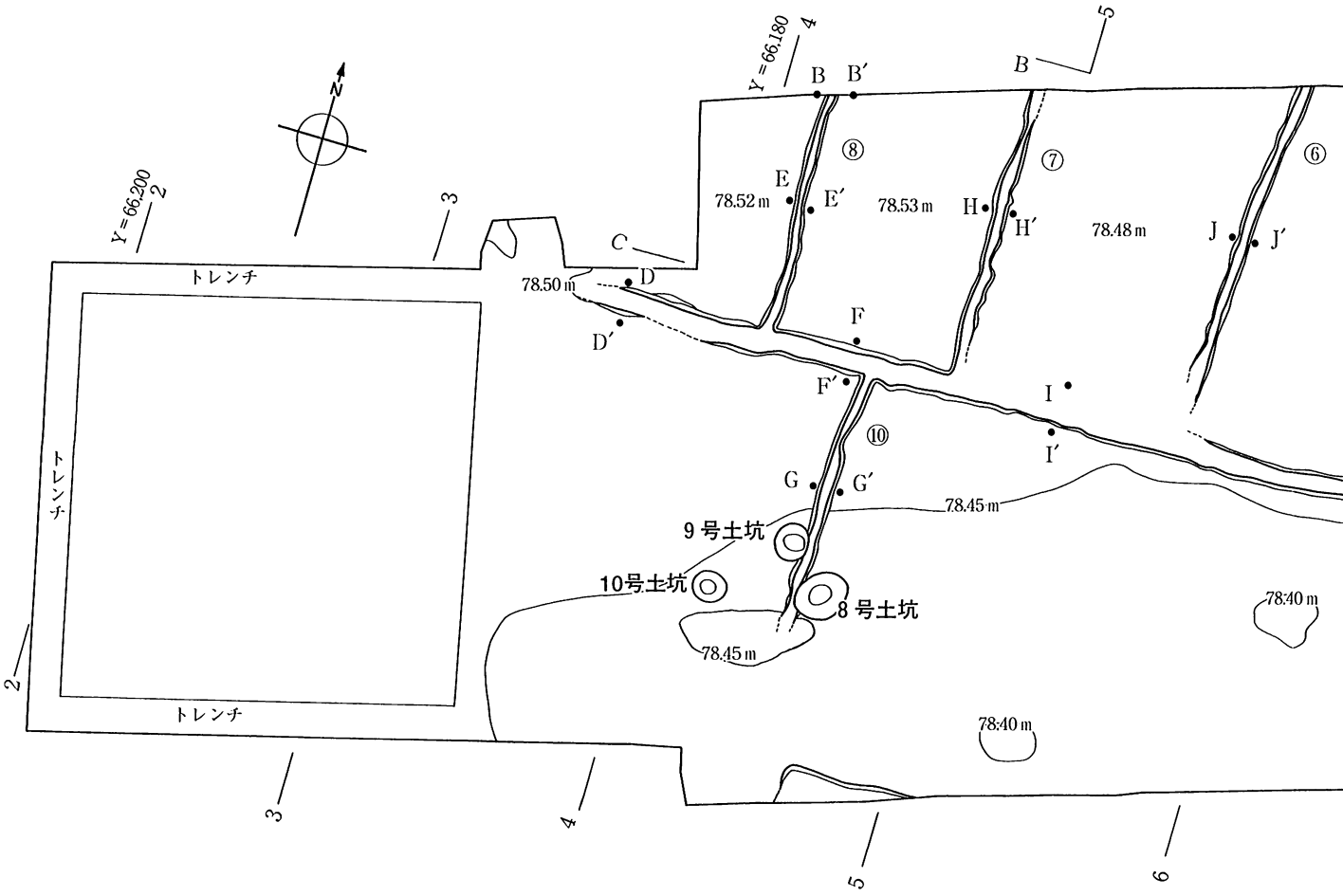
第３図　基本堆積土層図　縮尺１：20

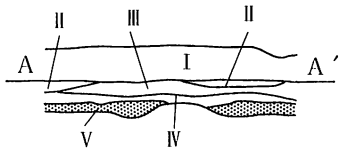
Ⅵ　検出された遺構

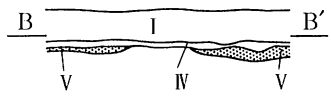
Ａｓ－Ｂ層下から水田跡が検出された。調査区の南・東・西側の一部は後世の削平、攪乱を受け、水田面は残っていなかった。検出された畦畔は、東西方向に走行する幅約70～100㎝の大畦畔が調査区中央に１条、幅約40～50㎝の畦畔が１条、南北方向に走行する幅約40～50㎝の畦畔が８条検出された。また調査区南東側でも幅約40～50㎝の畦畔が３条検出された。水田面の標高は約78.30～78.50ｍあり、北西から南東に緩やかに下る。水口は１か所確認することができたが、水路は検出されなかった。水田面の精査は、調査の都合上北側の一部と南東側の張り出している調査区で行い、動物の足跡と思われるものが検出された。

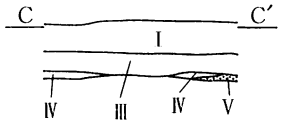
Ａｓ－Ｂ降下後の遺構としては土坑10基と溝１条が検出された。１号土坑はⅣ層の下から掘り込まれ、一部調査区外となる。その他の土坑は緩やかに立ち上がる浅い窪みであったが、遺構の性格については明確に判断し得なかった。１号溝は掘り込みが浅く、北から南に走行し、覆土はⅣ層に類似した単層である。

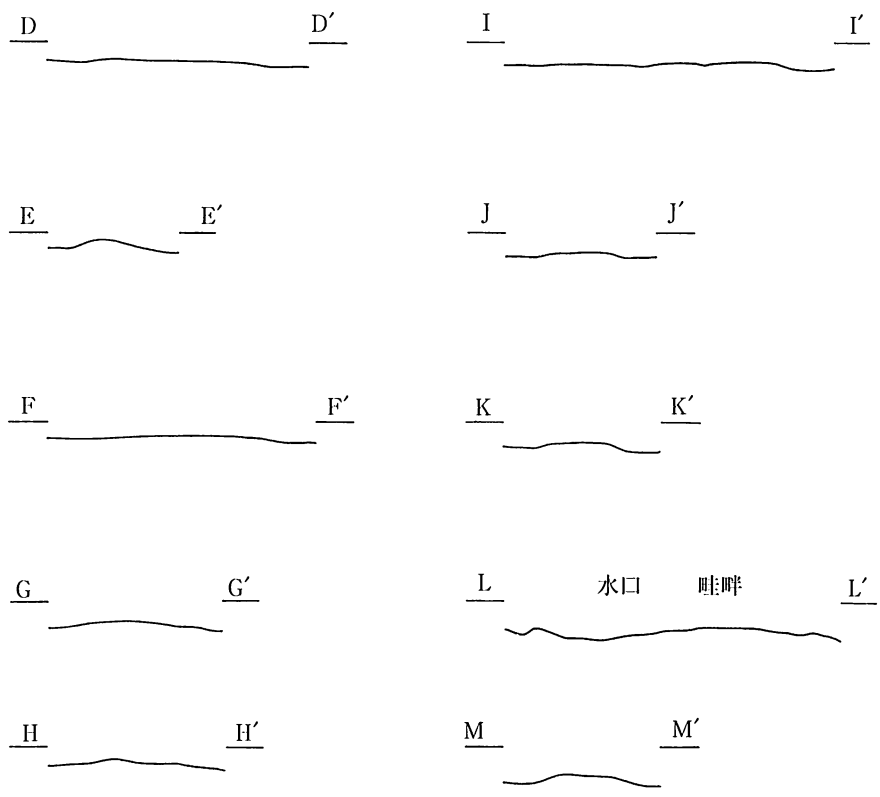
検出された遺構に伴う遺物は出土しなかった。



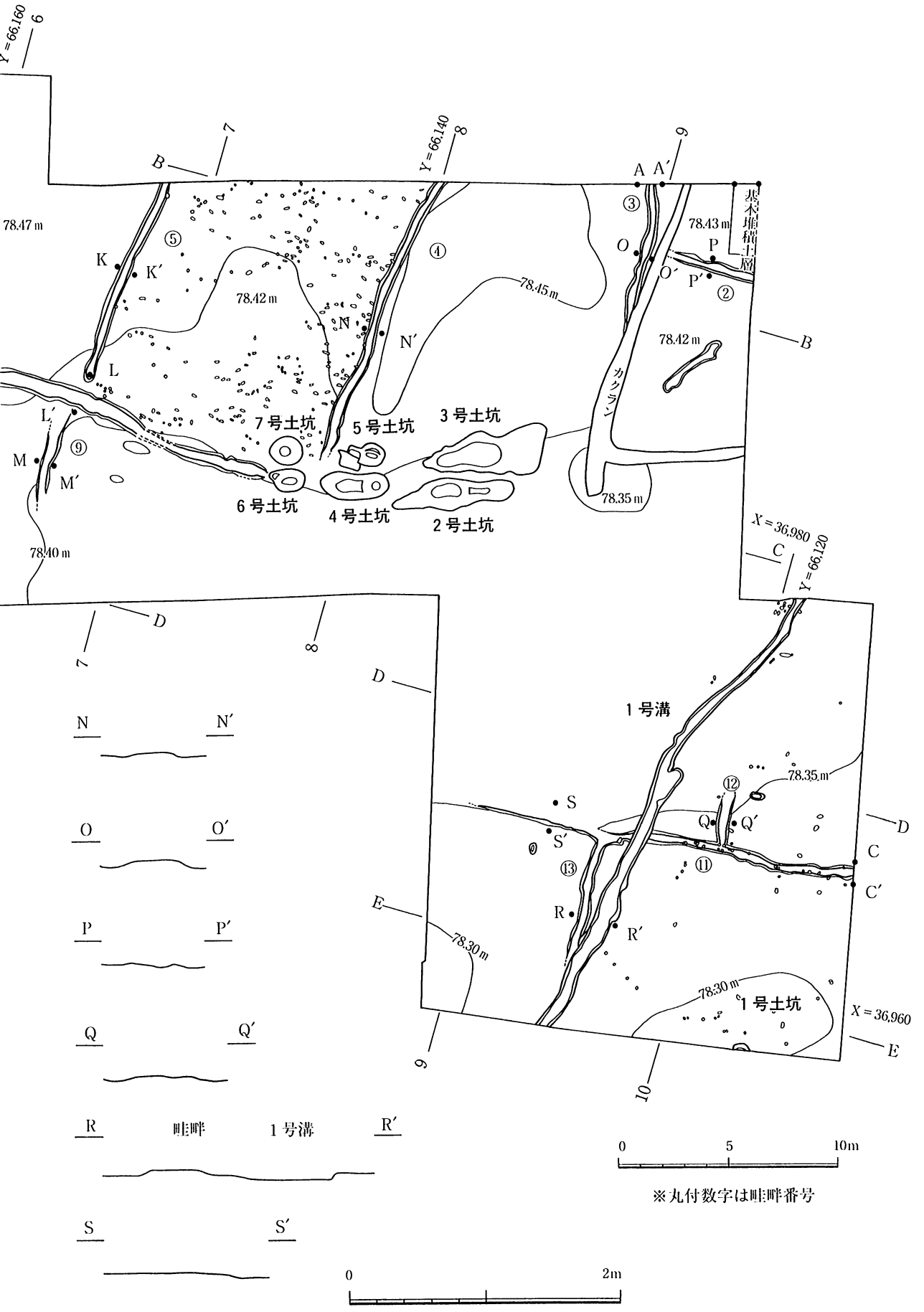




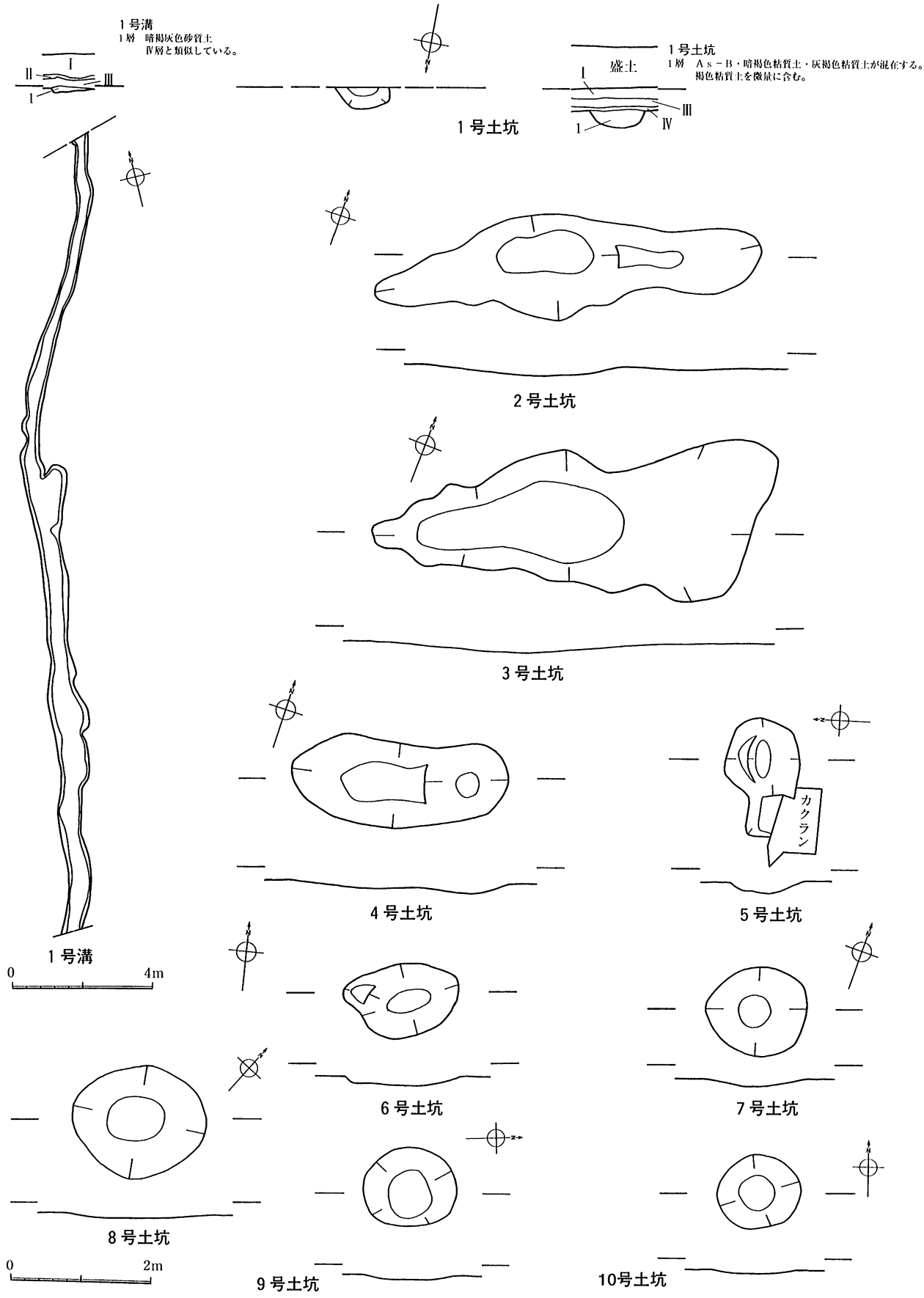




第４図　全体図（縮尺１：250）・畦畔（縮



尺1：40、基準高78.60m）



第5図　溝・土坑（基準高はすべて78.60m）

第１表　水田畦畔計測表

番号	上幅（m）	下幅（m）	高さ（m）	走行方位
①	0.42～0.76	0.58～1.00	0.01～0.05	N－87°－W
②	0.18～0.38	0.30～0.54	0.02～0.05	N－89°－W
③	0.16～0.38	0.32～0.61	0.01～0.07	N－6°－W
④	0.20～0.37	0.38～0.60	0.01～0.05	N－7°－E
⑤	0.18～0.36	0.34～0.54	0.01～0.03	N－6°－E
⑥	0.19～0.49	0.38～0.59	0.01～0.03	N－5°－E
⑦	0.12～0.46	0.23～0.76	0.01～0.06	N－1°－W

番号	上幅（m）	下幅（m）	高さ（m）	走行方位
⑧	0.16～0.32	0.32～0.52	0.01～0.05	N－0°－E
⑨	0.28～0.52	0.50～0.62	0.01～0.03	N－3°－W
⑩	0.14～0.46	0.32～0.60	0.01～0.07	N－3°－E
⑪	0.19～0.45	0.37～0.69	0.01～0.05	N－82°－E
⑫	0.20～0.46	0.43～0.62	0.01～0.04	N－8°－W
⑬	0.26～0.44	0.40～0.63	0.03～0.07	N－1°－W

第２表　土坑規模計測表

番号	平面形	長径×短径（m）	深さ（m）
1	不　明	不　　明	0.26
2	不整形	5.58×0.92	0.18
3	不整形	5.94×1.64	0.19
4	不整形	3.10×1.22	0.22
5	不整形	1.70×0.72	0.17

番号	平面形	長径×短径（m）	深さ（m）
6	楕円形	1.64×1.06	0.16
7	円　形	1.46×1.30	0.15
8	円　形	1.94×1.54	0.07
9	円　形	1.34×1.14	0.06
10	円　形	1.24×1.08	0.07

第３表　溝規模計測表

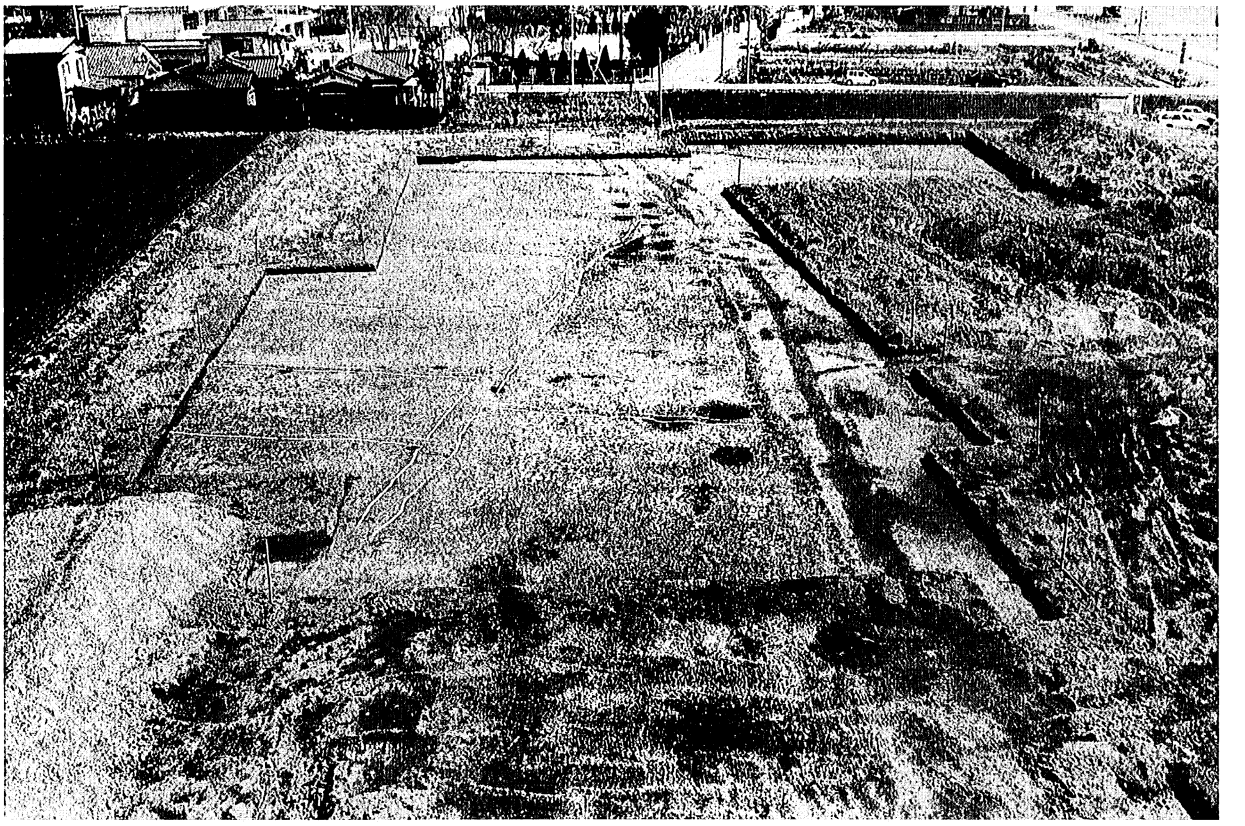
番号	幅（m）	深さ（m）	走行方向	走行方位
1	0.30～1.20	0.03～0.07	北→南	N－18°－E

Ⅶ　まとめ

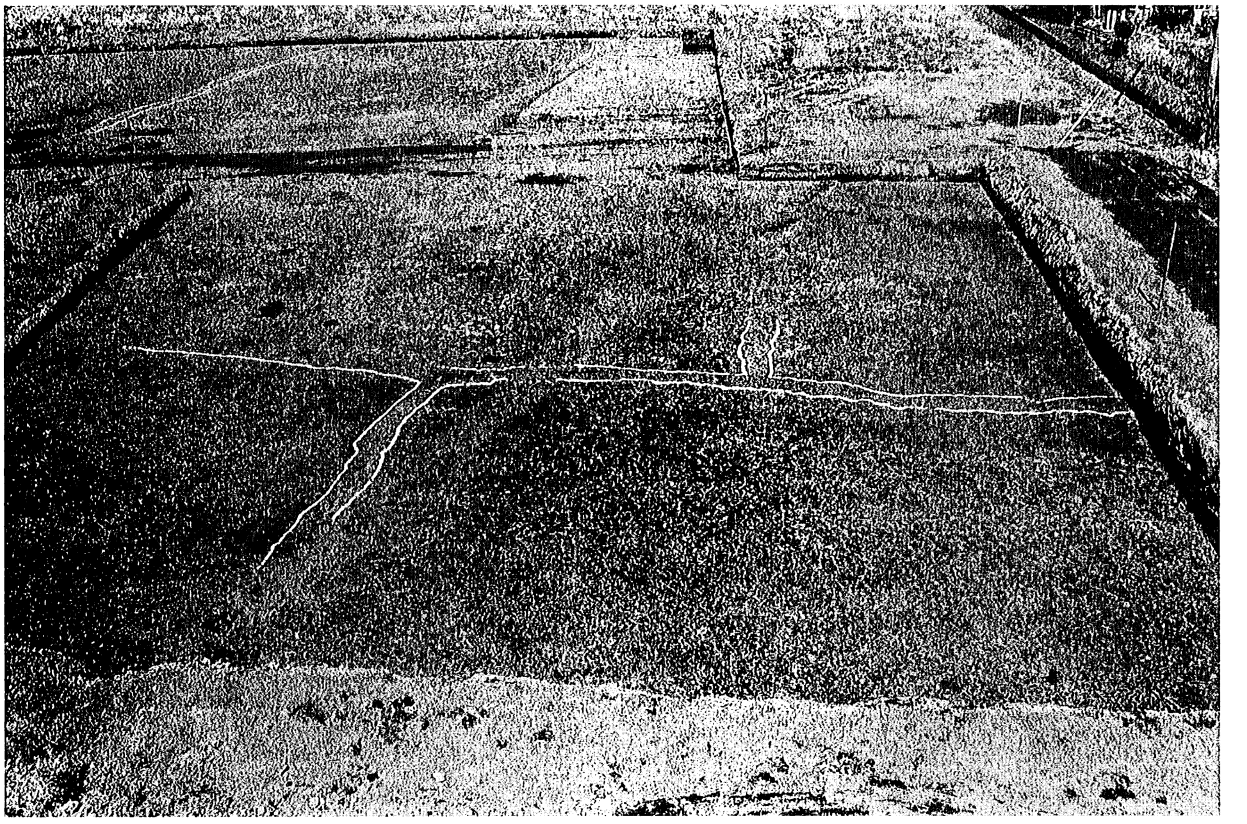
今回の調査では、平安時代末期の浅間山噴火に伴い降下したＡｓ－Ｂ層下の水田跡と降下後の土坑10基・溝１条が検出された。

水田跡からは大畦畔１条、畦畔12条、水口１か所が検出されたが、調査区が狭長であり、後世に削平されている部分が多いため、水田一区画の面積等は不明確であり、水路も検出されなかった。大畦畔は東西に走行し座標西から約３°北へ傾き、それと直交する畦畔７条は座標北から約１～７°の幅で傾き南北に走行する。このことから方格の土地割が想定でき、検出された大畦畔は、条里制における坪を区画する畦畔と推定される。

本遺跡の周辺遺跡でも同様の水田跡が検出されており、前橋台地上の後背湿地で広範囲に水田が営まれている。今回の調査結果が、条里制土地区割のどこに位置するかは、周辺遺跡の発掘成果に待たれる。また、今後はこの水田跡に伴う集落跡の解明が課題となるであろう。

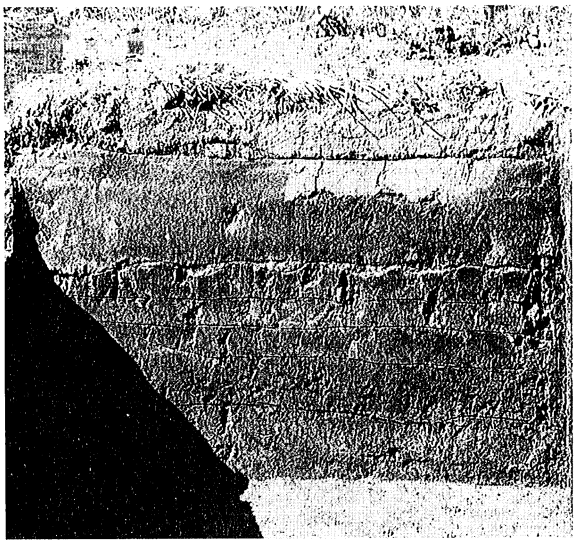


1．調査区全景（西→）

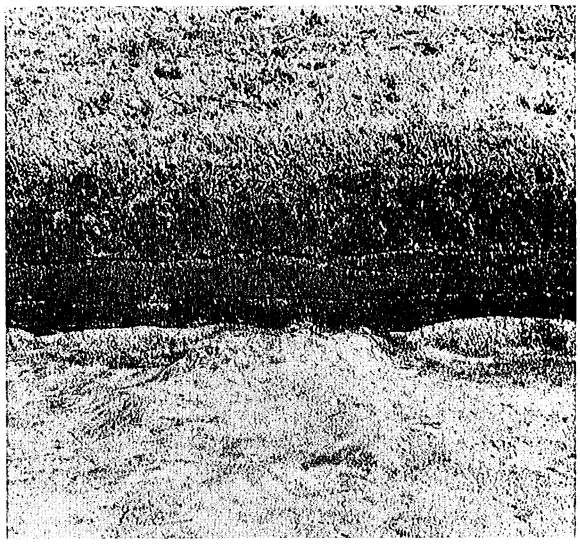


2．調査区南東側全景（南→）

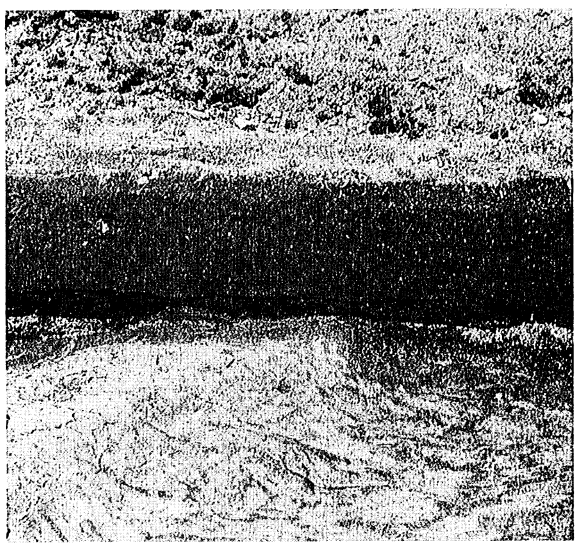
PL 2



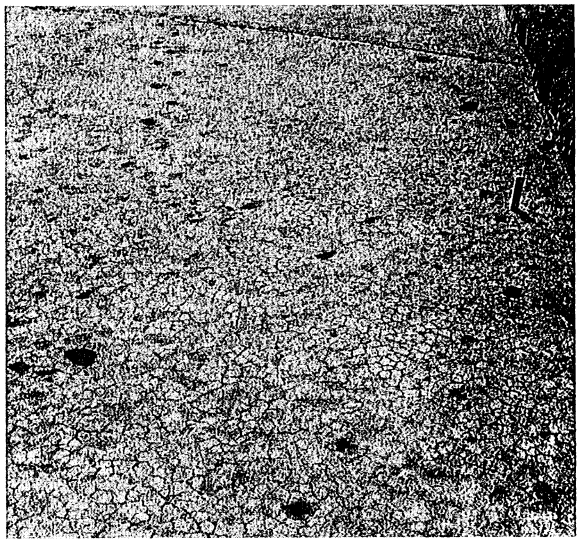
1．基本堆積土層（南→）



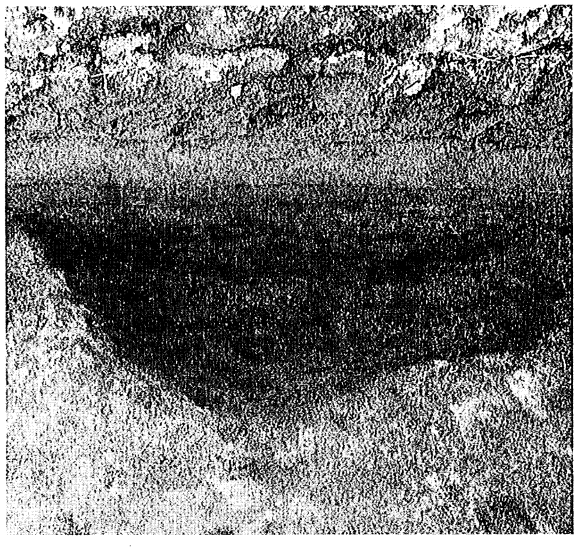
2．畦畔Ａ－Ａ′（南→）



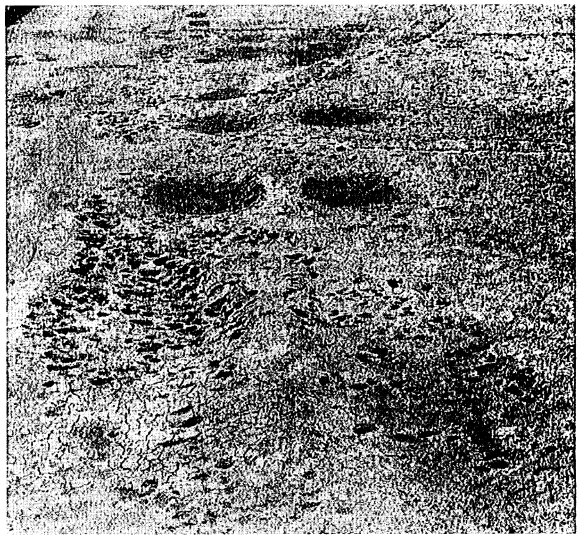
3．畦畔Ｂ－Ｂ′（南→）



4．調査区北側足跡等（東→）



5．１号土坑全景（北→）



6．２～７号土坑全景（東→）

抄　　録

フリガナ	ツルコウジネリビキイセキ
書名	鶴光路練引遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	井野誠一・野平伸一
編集機関	山武考古学研究所　〒286　千葉県成田市並木町221番地　TEL. 0476 (24) 0536
発行機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団　〒371　群馬県前橋市上泉町664－4
発行年月日	西暦１９９７年３月３１日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ツルコウジネリビキ 鶴光路練引	マエバシシツルコウジマチ 前橋市鶴光路町	10201	8G16	36° 19′ 51″	139° 05′ 48″	19970304 19970328	1,780㎡	下川淵公民館建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鶴光路練引	水田跡	平安時代	水田跡 溝　1条 土坑　10基	なし	なし

鶴光路練引遺跡

印　刷　平成９年３月29日
発　行　平成９年３月31日

編　集　山武考古学研究所
発　行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664－4
☎027 (231) 9531
印　刷　㈱ 文化総合企画
☎0476 (93) 0593